

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五卷 第五號

昭和二十二年十一月一日發行

論叢

稅制整理の基調……………經濟學博士 沙見三郎

失業と勞銀……………文學博士 高田保馬

『民約論』に於ける共同體思想……………經濟學博士 石川興二

時論

時局と水產業……………經濟學博士 蜷川虎三

研究

ルーテルの「職業」について……………經濟學士 澤崎堅造

チユルゴの租稅論……………經濟學士 島恭彦

エツヂワースと誤差の問題……………經濟學士 馬場吉行

說苑

一歐人の日本工業觀……………經濟學士 大塚一朗

チウネン圈の數學的説明……………經濟學士 山岡亮一

資本移動と景氣變動の問題……………經濟學士 松井清

カレツキ景氣循環論……………經濟學士 飯田藤次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

資本移動と景氣變動の問題

松 井 清

資本移動が輸出國及び輸入國の價格體系に對して如何なる影響を與へるかの問題を考へるに當つて、人々が先づ參照しなければならないものは古典學派の残したトランスファアの理論であらう。かの凶作物語に於て展開されたような餘りにも素朴な形態のものから、ケアンズ以來幾度びかの反省と修正を加へられてタウシツグ・ヴァイナーに至る古典的トランスファア理論は、今日に於てもなほこの領域に於ける有力な一武器たるを失はない。けれども極めて強力なこの傳統も全々批判の餘地を残さないと云ふわけにはゆかなかつた。殊に古典派の貨幣論的基礎、數量説に對しては、その精密化された形態のものに對してすら、數々の反對論が提起されたのである。主として大陸の學者達によつて唱へられたこれらの反對論は、しかし乍ら、單

に消極的な反對論であるに止まり、彼等の何れも古典學派に代るべき有力な體系を樹立するに成功したものは無つた。このことは戦後ドイツ賠償金をめぐる數々の論争に於ても同様であつた。そこでは古典學派の論義が異つた形に於て繰返へされるに止まり、何ら理論的な進歩は見られなかつたのである。

古典派の諸命題が新しい立場から見直され、更らに古典派の全々問題にしなかつた新しい問題が取扱はれ初めたのは大體一九三〇年の頃であると云へよう。例へばひとはケインズの著書に於て¹⁾、資本移動が古典派の如き國際收支に於ける不足の決済としてでなく、利子差による自發的資本移動として取扱はれてゐるのを見るであらう。ケインズはウイタセル・ハイエク等の名と共に周知の「自然利子、市場利子」の理論を國際經濟領域に應用することによつて興味ある研究を行つてゐる。また人はオーリンの著作に於て²⁾、トランスファアに於ける購買力移動の重要性が強調され、受取國に於ける需要變動が問題視されてゐるのを見るであらう

1) J. M. Keynes: A Treatise On Money, 1930 London Macmillan

2) B. Ohlin: Interregional and International Trade, 1933

がこの點も古典派によつては省られなかつた一面であつた。さて此處に紹介しようとする「資本移動と景氣變動」の問題は、ラグナー・ヌルクセがその著「國際資本移動論」に於て一章をあてた問題であり、彼自身の見解には未だ多くの疑問が残されることを認めるとしても、兎に角新しい問題の所在を明らかにしたものとて吾々の注目に値する。

二

(A) 資本輸入國に於ける景氣變動 資本移動が一般に資本輸入國に有利な景氣の發展をもたらすことは殆んど詳細な説明を必要としない。資本輸入によつて招來される生産設備の擴大は、本源的生産要素及び生産された生産手段に對する需要を増加し、諸々の取引過程に生起を與へるであらう。そして資本輸入以前に於ける國民經濟が靜態にあると假定するならば、資本輸入の開始と共に輸入國に於ける勞銀が騰貴し初める。勞働は國際的に移動不自由であるから、國內生産に必要な追加勞働力は外國から吸引され得ず、その結果國民

勞働力の稀少性が高まる。同様のことは國際的に取引され得ない國內財に特殊的な生産財についても妥當する。何故ならばこれ等の生産要素は資本輸入の繼續する限り高き限界生産力を維持するからである。之に反して資本輸入の中止は單に景氣膨張の中絶を意味するのみならず、或る事情の下では景氣の後退を意味する。

ヌルクセはその理由を固定資本の使用と關聯する資本主義的生産方法の一定の特殊性のうちに求め、景氣變動に關する自らの見解を簡單に述べてゐる。説明の手段として彼は社會的生産構造の次の如きシエーマを使用する。全經濟過程を二つの大なる生産部門に分ち一方の生産部門は生産財のみを他方のそれは消費財のみを生産する。かゝる生産部門の二分化は、資本家的生産方法が高度に資本財を使用することよりの必然の歸結である。均衡の状態から出發すると、貯蓄率の上昇従つて生産財生産部門の生産物に對する需要の増加は、その部門の生産設備の擴張へ導く。機械に對す

3) Ragner Nurkse: Internationale Kapitalbewegungen 1935, 5 Kapitel: Kapitalbewegungen und Konjunktur SS. 187-218.

る追加的需要を満足せしむるために先づ追加的機械工場が建設せられる。ところで生産財生産部門のこの擴張が繼續するためには、新しい需要状態が生産財生産部門の擴張後一定時間内維持せられることを必要とする。その期間内に貯蓄率が元の大きさに立歸るならば新しい機械産業の生産物に對する販賣可能性は消滅し、その投資は過誤投資 (Fehlinvestierung) であることとなる。言葉を換へて云ふならば固定資本の經常消耗率が擴大された生産能量を働かすに充分であるよりも早く貯蓄率がその元の大きさに立歸つてはならないのである。然るに現實の經濟に於て、社會的な貯蓄率の變動が、右の如き發展の條件を保つが如く行はれねばならぬと云ふ何らの必然性も存しない。社會の貯蓄率は彼の貯蓄の將來の全經濟的作用に何らの關心をも持ち得ない個々の經濟主體の行爲と決斷の結果である。

ヌルクセはこれだけの豫備概念を以て國際資本移動の例に説明を加へてゐる。この場合投資さるべきもの

は國內の貯蓄プラス輸入資本と云ふことになる。國民的貯蓄率の支配しえない變動が甚しい攪亂の原因をなしたように、或ひは屢々より高い程度に於て資本輸入の場合にも同様のことが妥當する。既に明らかにされた資本主義的生産構造の特殊性の故に、資本輸入の流の變動は、重大な景氣の後退を招來することがある。資本輸入の突然の中絶はこれまで外國信用の助を以て營まれてゐた投資の一部を價值低下せしめ、そのことから不生産的となつたこの負債に對して純經濟的立場から流動化の要求が生れる。それは現實には負債者の側に於ける強制的支拂停止の形態をとる。資本輸入率の減退は先づ第一に信用受領國の部分的過剰生産即ち生産財部門の販賣困難を招來するに違ひないが、この後退は單に生産財部門のみに止らず一般經濟状態の後退へ、デフレーションへ導く。

(B) 資本輸出國に於ける景氣變動 この場合資本輸出がその國の貯蓄率の増進から起る例、即ち利子差異が供給の側から起る例は問題とならない。問題になる

のは資本輸出への刺戟が需要の側から起る場合に限られる。B國の利率が何らかの理由によつてA國の利率に對して上昇したとしよう。資本はA國からB國へ向つて流出し、利率はA國に於て若干騰貴する。A國の生産財に對する需要は減少しその価格は下落する。AからBへの資本輸出は先づ第一に新しく形成された貯蓄資本から成立つ。然るにAに於ける新しい貯蓄の範圍が兩國間の利率差異を除き去るに充分でない時には、資本の流は部分的にAに於ける既存の貯蓄から成立つことになる。いま利率差がAからの新貯蓄の輸送によつて除き去られるには餘りに大きすぎると假定しよう。そのことは償却部分もまたAからBへ移轉することを意味する。A國は如何なる影響を蒙るであらうか。償却率は資本財の種類異なるに従つて異つた高さであり得る。流動資本は一年に五だけの償却率を持つに反し、固定資本はその耐久年限を五ヶ年と假定すれば、一年に五分の一の償却率しか持たない。とすればA國からB國へ送らるる償却資本は明らかに迅

速に償却さるる資本財のそれから成る。従つて流通資本財に於ては代置が行はれなくなり、その結果固定資本は補完生産手段を失ふことになる。こうして特定の資本數量を一つの設備から引上げるとは、單にそれだけの損失に止らず、全設備の價值を低下せしめ一大損失を惹起する。勿論損失の程度は、固定資本の耐久期間、及び流動資本との有機的聯關の強度等に依存し、極めて種々の大いさであり得る。既に指摘されたように、資本輸出が新しく形成された貯蓄から成立つ場合にはかゝる損失は生じない。

三

資本移動と景氣變動の以上のような關聯を、ヌルクセは更らに市場利率と自然利率の差別による理論の適用によつて一層明らかならしめてゐる。この系統の議論に従ふと景氣は次のようにして説明される。自然利率が市場利率より高まると企業家は新しい追加信用を採用し、それによつて生産擴張に必要な財と勞務を調達する。その際彼自身は一つの「純粹需要」を展

開し、他の經濟主體に於ては謂はゆる強制貯蓄が成立つ(それは必ずしも追加の追加信用によつて行はれる必要なく、退藏貨幣の流通速度の増加によつても行はれうる)この強制貯蓄によつて金融される資本構造の擴大は、遅かれ早かれ必然に破壊されて、景氣の後退に導くに違ひない。沈滞の過程に於ては市場利子率は自然利子率の上位に位する。

さてかくの如き命題を國際經濟關係に適用するためニルクセは二國を假定し、各國は獨立の銀行及び貨幣制度を持ち、比較的自主的な信用政策及び貨幣政策を行ひうるものとする。更らに兩國に於て共に自然利子率は市場利子率に一致して居り、而もその各々が兩國に於て等しい水準を示す状態が假定される。この場合二つの利子率間の相對的變化、また二國相互間の利子率の變化の種々の可能性が與へられるが、いま假りにA國に於ける信用量の増加の結果、A國の市場利子率が自然利子率以下に下落した場合を考へてみよう。この利潤差 (Gewinnspanne) はA國に信用膨張と景氣

上昇をもたらすが、同時にそれは資本移動によつて景氣同時化的 (Konjunktursynchronisierend) に作用する。

B國は自ら信用擴張を行なうことなくして先行するA國の信用インフレーションの作用領域に引き込まれる。そして後に至り——信用擴張の突然の中止に際しては——A國が景氣の後退を忍ばざるを得ないようにB國もまた外國のインフレーションを原因として同様に恐慌の打撃を受ける。尤もその際次の如き決定的な條件が満足されねばならない。即ち財貨による資本のトランスファーを可能ならしむるために、資本輸出國に於ける價格は一定に止まるか、或ひは信用擴張の量に相應するよりもより少く騰貴しなければならぬ。そうでなければ國際收支の均衡機構は一般物價騰貴のために作用しなくなり、資本移動は實現しないことになる。

さてA國に於ける自然利子率と市場利子率との差異がポジティブな方向に起る場合、即ち市場利子率が下落したのではなく、自然利子率が上昇した

のによる場合には、國際資本移動の媒介する國際景氣現象は前の場合とは全く異つた様相をとるに至る。A國に於ける資本設備の擴張はA國自身で行はれる強制貯蓄のみによる必要はない。高められた資本需要はむしろ一部分B國によつても満足され、従つてB國に於てはこの資本引抜によつて景氣の沈滞現象が惹起する。かくて資本移動は必らずしも景氣同時化的に作用する必要はなく、景氣別異的 (Konjunktureffenzier) にも作用し得るのである。この一見奇異に見える事態は、しかし乍ら、より些細に検討すればかなり自明な事柄である。何故ならば一經濟區域内の特定の場所に於て生ずる繁榮は、他の場所に於ける限界投資の拋棄へ導き、従つて他の場所に於て生ずる沈滞の犠牲に於てのみ起り得るものだからである。

デフレーションの場合にも全く類似の説明が妥當する。市場利子率の引上げによつてA國の自然利子率と市場利子率との間にネガティブな差異が生じたとすれば、そのためにBに於てもまたデフレーションが起

ることになる。之に反してA國のデフレーションを引起す利子差異が自然利子率の下落に基く場合には、解放された資本のB國に對する輸出の傾向が生れ、その結果B國には景氣の勃興が見られる。

ヌルクセの見解を簡単に要約すればこうである。相交通する二地域に於ては決定的な運動の原因が市場利子率である場合にのみ、單一的にインフレーション或ひはデフレーションを招來する。之に反して原因が自然利子率にある場合には、一方のインフレーションは他方のデフレーションを、一方のデフレーションは他方のインフレーションを喚起することとなる。この相反は利子差異の基礎をなす實物經濟の過程を觀察すれば、容易に理解されるであらう。前者の場合には資本供給の引起した資本移動のために、それに相應する投資活動が全領域に波及するし、後者の場合には資本需要の増加から引起された資本移動のために他の地域に於ける限界投資の犠牲が強制される。

四

さきに指摘したようにケインズはマルクセの書物の發行に先立つこと五年、既に一九三〇年に自然利子と市場利子の理論を國際經濟關係に適用してゐるのであるが、マルクセの所説はケインズに對して如何なる發展を示してゐるであらうか。更らにマルクセの議論自身は如何なる點に於て批判されるべきであらうか。それらの點について極めて簡単に記しておこう。

ケインズが 'Treatise on money' の第二十一章に於てこの問題を取扱ふに當つて出發點に置いた状態、即ちマルクセの假定した出發點と同一である。そして彼は一國（A B 二國のうちの A 國）に於ける投資の誘引性が増加した場合、換言すればその國に於て自然利子率が市場利子率を上廻つた例を考察してゐる。その際ケインズが主として問題の中心に置いたものは、新しい均衡に於ける A B 兩國の所得水準の高さであつた。資本移動が二國の生産に如何なる變化を與へ、従つてその生産に用ひられる生産諸要素の貨幣所得に如何なる變化を

與へるかゝ問題であつた。この限りに於てケインズは出發點に於て古典派とは異つた問題の建て方をし乍ら問題の取扱ひ自體に於ては全く古典派的であると云はるべきであらう。何故ならばその限りに於て考察はトランスファ―と實質交換比率の問題——それはあたかも古典派資本移動論の中心問題であつた——を一步も出てゐないからである。それ故にマルクセが社會的再生産の構造を規定し、資本移動と再生産の關係を明らかにしたことは、たとひ窮極に於て即ち新しい均衡の状態を論ずるに於て古典派と同一の結論に達したとしても、確かにケインズを超えてゐると云ふことが出來よう。

しかし乍ら吾々は資本移動と景氣變動の關係についてのマルクセの取扱ひ自體に若干の疑問が持たれることを否定してはならない。彼れがハイエクの生産構造論を却けてマルクスの再生産構造論をとつたことは正當である。けれども彼れが固定資本の高度の使用を以て資本主義生産の第一義の特徴と看做すことは果して

正しいであらうか。吾々はマルクセに對して先づ形式的には彼れの見解が更らにマルクスの生産構造論の修正を要求するのではないかと疑問を提出し得る。何となればマルクスの表式に於ては、不變資本と可變資本の對立こそ本質的なものとして豫想されておれ、固定資本は技術的なものとして以外それほど重要な役割を果してゐるようには思はれないからである。固定資本と景氣變動の間に何らかの關聯を認めるとしても、その關聯を本質的なものとすることは疑問視されねばならぬ。吾々は更らに進んで根本的には貨幣的景氣論そのものを問題とすべきであらうが、この小論に於ては勿論その餘裕を持たない。